

生涯発達と性役割
— 社会文化的役割からみた専門職者の性アイデンティティ —

松村 恵子
(香川県立保健医療大学)

Life-Long Development and the Role of Gender
— Gender Identity of Specialists from the Viewpoint of
the Assignment of Social and Cultural Roles —

Keiko MATSUMURA
Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Abstract

This paper considers the role of gender in the context of life-long development and focuses on specialists in the perspective of social and cultural role assignment and personal relationship skills. In the discussion, femininity and masculinity are not viewed as opposing, polarized characters; people are believed to be inherently androgynous. An analysis of gender identity held by nurses engaged in the growth and development of children revealed a high level of affirmation for both <femininity> and <masculinity>, which were found significantly correlated with the affirmation. With respect to the close association of study items, <social desirability> formed a prevailing cluster. It suggested that, from the concept of androgyny, nurses focused on <social desirability>, were androgynous, and saw <femininity> and <masculinity> belong to independent categories.

1. 緒言

どんな文化においても、女性か男性かという性別が生涯発達に及ぼす影響は大きい。本論では、一人ひとりの生涯発達という文脈から生じてくる性役割が在ると考える。ここでは、女らしさと男らしさを対立的・二分極的特性と考えるのではなく、寧ろ、これらはパーソナリティの独立した二次元だと考える。

すなわち、人間は、本来的に両性具有的存在 (Androgyny) であり、女らしさと男らしさという

対人的特徴の双方を同じように認めると考え、まずは、社会文化的な役割から、双方の対人関係技能を持つであろうと予測される専門職者に焦点をあてる。

女性か男性かという性別による役割は文化によって異なるといえる。これは性役割に限らず、大抵の「役割」というものは総て、その社会によって期待される行動様式だからである。そして、この行動様式は社会における集団の価値観・文化に影響される。このような社会のしくみから、文化的概念としての性アイデンティティについて分析する。下條¹⁾は、性アイデンティティとは性志向性を持ち、特定の文化において、その性に適切な行動や特性（性役割）を含んだ概念としている。

これまでに筆者が行ってきた母性意識に関する実態調査^{2) 3) 4) 5) 6)}では、他者の子どもに関わる保育士では、「子育ては女性に備わっている特有の性質によって行われる」という考え方よりも、「子育ては人間として子を産み育てるために女性に限らず誰もが行う」という考え方を肯定することが明らかになっている。これは、文化的概念としての性志向性や、性役割をもっていることが推測される。そこで今回は、専門職者として子どもの成長発達に関わる保育士の性アイデンティティについて実証的に検討する。

2. 問題となる概念

生命が誕生するためには、女性と男性の存在が必須となる。この二つの性について、生物学的、心理学的、文化・社会学的側面から両者を比較してみると、明らかに性差が生じているのは生物学的性差である。また、通常、性染色体は二つであり女性に生まれるか、男性に生まれるか、二つに一つである。この性差に裏付けられる女性の役割や男性の役割は、普遍的で固定的なものなのだろうか、女らしさや男らしさは、生物学的に規定された差なのだろうか。

1) 性差と性役割

性染色体、生殖器、性ホルモンによる女性の初潮、男性の射精開始など、形態的・機能的な出生前からの生物学的性差は絶対的に在るといえる。その反面、男女共同参画社会がすすむ今なお社会通念として語り継がれている「男は度胸・女は愛嬌」、「男は理性的・女は感情的」など心の在り様についての心理学的性差や、「男は仕事・女は家庭」、「男は主・女は従」など性別分業を表す文化・社会学的性差は、出生後の学習や経験など社会生活の過程で生じてくるもので相対的だといえる。

Maccobyら⁷⁾の研究では、「女の子は男の子よりも社会的である、男の子は分析的である」などの特性は確立されていないと報告している。また、Margaret Mead⁸⁾は、南太平洋諸島にある未開発社会に住むサモラ族など、7つの民族における性役割について実地調査し、日本とは異なった文化による性役割や、女らしさ男らしさが形成されていることを報告している。

性役割の概念は、性や性別とは対照的に、ある文化において女性か男性かのいずれかに適している、或いは、望ましいとされる意識や行動について一連の体系化された期待を包含している。

これらの先行研究から、心理学的、文化・社会学的な性差や性役割は、普遍的で固定的なものではないことは明らかである。しかしながら、生物学的性差に規定され、文化や歴史など時代の流れの中で、恣意的にしばしば精巧に、あたかも固定的であるように作りあげられてきたことも事実である。

2) 生涯発達と性役割

Baltes (1987) ら⁹⁾ は、「獲得と喪失としての発達」の概念から、発達の過程は、量的増大としての成長といった、高い有効性の実現へと単純に向かう過程ではない。むしろ発達は、全生涯を通じて常に獲得（成長）と喪失（衰退）が結びついておこる過程であるとしている。

従来の（1990年代以前）「発達」についての捉え方では、人間が3 kgで誕生し50kgの体格へと育っていく過程や、「ア～ウ～」の発語から言語を巧みに活用できるようになっていく過程など、成熟し完成されていく過程に関心がおかれていたといえる。

しかし、人間の生涯は成熟し完成されたものになっていく、という変化だけが生じているのではない。多様な場と複雑多岐にわたった関係のなかで生きる存在である。成熟し完成されていくことによって実現するものは何かという問いと、失うものは何かという問いを、そして、生きることの意味を繰り返し発見していく過程を生涯発達と考える。

具体的には、測定可能な形態（身体面）の成熟に向かつての量的変化、長さや重さ大きさに関して用いる場合は《成長（growth）》。測定が不可能とされる機能の巧みさや、能力などの質的な変化に関して用いる場合は《発達（development）》と整理できるのではないだろうか。また、体重や身長などは形態的成長、呼吸や循環、免疫などは機能的発達、感覚や運動、情緒や社会性と生活習慣、理解や言語は精神発達として捉えることができ、時間の経過と共に系統的、組織的に変化する現象、すなわち、現存する体細胞の相と生殖細胞の相を包括し、受胎から死に至る人間の生涯にわたる変化が生涯発達の諸相と考える。

本論では、個人の生涯発達という文脈から性役割を捉えようとしているが、ここでは、性別、社会文化的役割規定、対人関係技能や特性などの概念、個性記述的、内的な個人の変数などを組み入れた、より広い視点が必要であると考えられる。この課題へのひとつのアプローチとして、性役割の概念をひとつの文化における職務記述として捉える。社会文化的役割規定の観点から見た職務としての性役割は、大きく次の4つの構成要素に分類できる。①職務わりあて、あるいは選択 ②果たすべき作業についての職務分析 ③職務遂行、すなわち、作業達成に必要とされる技能・知識・行動 ④職務への満足、すなわち、前述した3つの構成要素のおのおのに対して個人的に自分から関わった反応としている。¹⁰⁾ この考え方に基づいて検討する。

3) 性役割と性アイデンティティ

生物学的性差に関連して社会的・文化的に定義されたgenderは、つくられた性別であり、それに付随する役割は、社会的・文化的に価値づけを伴っているといえる。sex roleが、生物学的性差を基準にした役割定義であるのに対し、性や性別とは対照的に、ある特定の文化において女性か男性かのいずれかに適し、或いは望ましいとされている行動や活動についての一連の体系化された期待を含み、態度や価値観など社会構造との関連性を持っている場合、gender roleとして区別されることが多い。

性役割は、女性や男性としての自己をどのように認識するか、或いはしているかについて、公に表現することで社会が期待し自己が認知し、それに従って遂行する役割といえる¹¹⁾。

柏木¹²⁾ は、性アイデンティティ概念を①性役割行動（行動、性格、態度などを含む現象や行動

上の性差)は行動のレベル、②性役割観(性役割についての独自の概念)意識のレベル、③性役割同一性(女らしさ男らしさの自己評価)意識のレベルで、これら3つが性アイデンティティを形成しているとしている。

Bem, S.L.¹³⁾ (1974) は、これまで社会的に望ましいとされてきた男性像・女性像のみにとらわれることを否定し、今後の方向として両者の特性を兼ね備えるpsychological androgynyが男女両性にとって望ましい人間像であると主張した。Bemは、従来の男女の役割分担を前提とする性役割からの開放を行う目的で、この尺度(Bem Sex Role Inventory)を作成したといわれている。

性アイデンティティの問題を検討する視点は様々である。男女間の社会的分業が権力関係であるという視点に立って、男女の役割が支配=被支配の関係にあるという含みを持つ場合もある。

日本の社会は少子高齢化が進み、子どもの数の減少と並行するようにして乳幼児の虐待は増加している。本論では、子ども・子育て応援プラン(2005-2009年)の提唱など、今日の社会が専門職者に期待する性役割、特に、社会文化的な役割からみた性アイデンティティを問題とする。

3. 目的

性アイデンティティは、自己が認知している性役割と、他者や社会が期待する性役割との調和をはかり、文化や社会の文脈のなかで主体的に容容させながら形成され確立すると考える。そこで、専門職者として子どもの成長発達に関わる保育士の性アイデンティティについて、実態を分析し特徴を明らかにする。

4. 方法

①対象：A県の私立の保育園で働く自らの出産と子育て経験がない女性保育士とした。②調査期間：2005年3月から2005年5月に調査した。③測定用具：下條英子¹³⁾ が作成したBem Sex Role Inventoryの日本語版を用いた。これは、男性性尺度20項目(M)、女性性尺度20項目(F)、社会的な望ましき20項目(N)計60項目で構成されている。各項目に対する評定は、1)全く違う、2)違う、3)どちらでもない、4)そうである、5)全くそうである、5段階とした。④データ収集：事前に施設長に研究の目的と方法、協力の是非について文書で相談し、協力者数を確認後に調査票と返信封筒を送付、質問紙調査法で郵送による個別回収とした。⑤倫理的配慮：研究に対する同意の意思を確認し調査票を配付した。調査票は無記名で封書とし個人の特定を回避した。データは統計的処理とし研究目的のために活用することと、全体的な結果報告を約束した。⑥分析方法：統計解析パッケージSPSS 14.0Jを用いた相関(2変量)とクラスタ分析(階層クラスタ、メディアン法、Pearsonの相関)を行った。

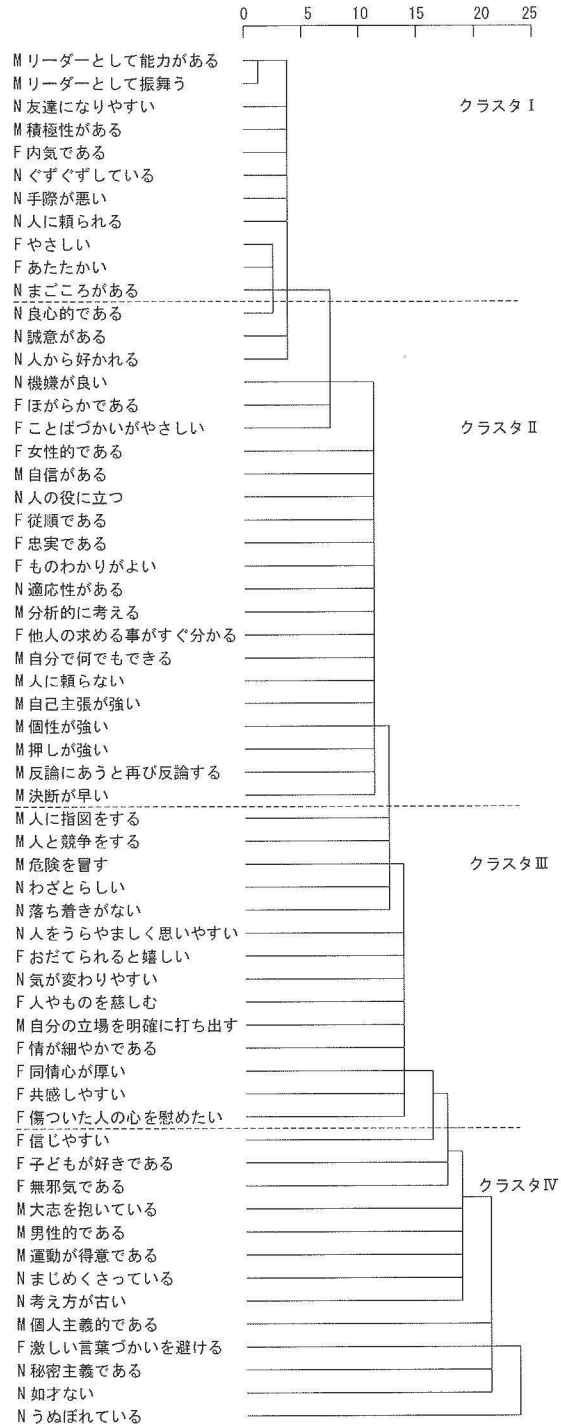


図 1 性アイデンティティのデンドログラム

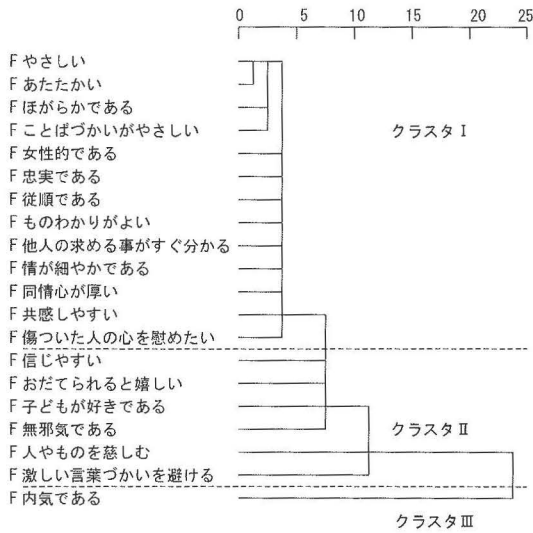


図2 女性性尺度のデンドログラム

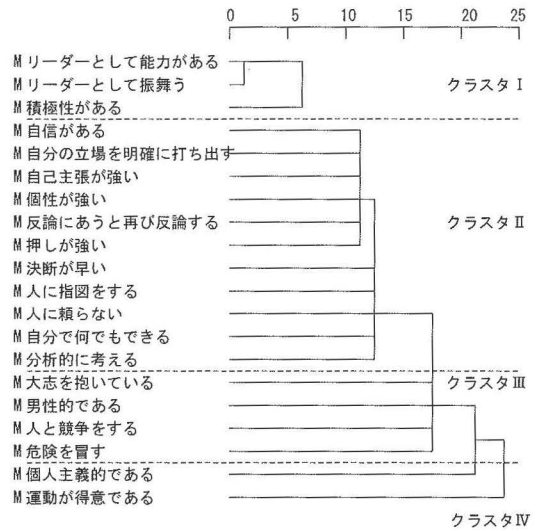


図3 男性性尺度のデンドログラム

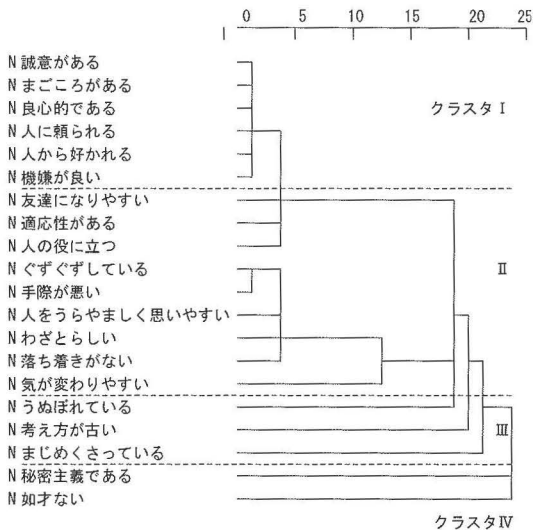


図4 社会的望ましき尺度のデンドログラム

5. 結果

①回収率：回収率96%（210部を配付の結果、有効回答202部）であった。②対象者の年齢：平均年齢は25歳であった（20-56歳）。③保育士志望年齢：平均年齢は13歳であった（4-36歳）。④勤務経験年：平均年は5年であった（0.1-30年）。⑤記述統計：女性性尺度の平均点が高い項目は、《評定段階：全くそうである》が「子どもが好きである（4.63）」と、《評定段階：そうである》が「おだてられると嬉しい（4.02）、共感しやすい（3.97）、傷ついた人の心を慰めたい（3.85）、信じやすい（3.79）、同情心が厚い（3.74）」等12項目であった。低い項目は、《評定段階：どちらでもない》が「内気である（2.92）、ことばづかいがやさしい（3.06）、他人の求めがすぐ分かる（3.08）、女性的である（3.13）」等8項目であった。男性性尺度の平均点が高い項目は、《評定段階：どちらでもない》が「運動が得意である（3.37）、大志を抱いている（3.11）、個性が強い（3.11）」等5項目であった。低い項目は、《評定段階：違う》が「危険を冒す（2.34）、押しが強い（2.48）、自信がある（2.55）」の3項目であった。社会的望ましき尺度の平均点が高い項目は、《評定段階：そうである》が「人をうらやましく思いやすい（3.65）、機嫌が良い（3.61）、まごころがある（3.60）」等5項目であった。低い項目は、《評定段階：違う》が、「わざとらしい（2.49）」の1項目であった。⑥尺度の相関：いずれの相関も高く、男性性と女性性（ $r=0.974$ ）、男性性と社会的望ましき（ $r=0.940$ ）、女性性と社会的望ましき（ $r=0.945$ ）であった。⑦クラスタ分析：Pearsonの相関から有意確率を導き出し4つのクラスタを見いだした。図1に示したように、類似度が高いのは、男性性尺度の「リーダーとして能力がある」と「リーダーとして振舞う」（ $r=0.719$ ）、続いて女性性尺度の「やさしい」「あたたかい」と、社会的望ましきの「まごころがある」「良心的である」で、「友達になりやすい」、「人に頼られる」など14項目で、《女性性尺度》と《男性性尺度》が共に3項目、《社会的望ましき》が8項目を占めていた。女性性尺度は、図2に示したように3つのクラスタを見いだした。類似度が高いのは、「やさしい」と「あたたかい」で（ $r=0.655$ ）、同じく「ほがらかである」（ $r=0.424$ ）、「ことばづかいがやさしい」（ $r=0.477$ ）であった。男性性尺度は、図3に示したように4つのクラスタを見いだした。類似度が高いのは、「リーダーとして能力がある」と「リーダーとして振る舞う」で（ $r=0.719$ ）、同じく「積極性がある」（ $r=0.566$ ）であった。社会的望ましき尺度は、図4に示したように4つのクラスタを見いだした。類似度が高いのは、「誠意がある」と「まごころがある」で（ $r=0.619$ ）、同じく「良心的である」（ $r=0.537$ ）、「人に頼られる」（ $r=0.420$ ）、「人から好かれる」（ $r=0.366$ ）、「機嫌が良い」（ $r=0.370$ ）で、「ぐずぐずしている」と「手際が悪い」（ $r=0.607$ ）であった。

6. 考察

子どもへの関わりを専門職とする保育士の性アイデンティティについて、実態を分析した結果、三つの尺度における項目の平均得点では、女性性と男性性の肯定度が高く共存していることが明らかになり、いずれも正の有意な相関が認められた。また、項目の類似度では、社会的望ましきが優位のクラスタを形成していることが明らかになった。

今回の明らかになった特徴から、平均年齢25歳で勤務経験の平均5年を経過した保育士では、Androgynyの概念から考えると、社会的望ましさを中心に据えて、二つの性を共に合わせ持ち、女性性と男性性を独立した次元で捉えようとする性志向性を持っているといえる。

このことから、専門職者の性アイデンティティの特徴として、社会文化的な役割規定により、女らしさと男らしさは社会的望ましさを軸として、双方の対人関係技能をもつことが示唆された。

ここでは、専門職者の性アイデンティティ、Androgynyの概念からみた保育士の性アイデンティティについて考察する。

1) 専門職者の性アイデンティティ

人間のアイデンティティは、複合的なもので、それは普遍的な問題に関する諸要素を内に含むと同時に、特殊な背景に関する諸要素も内包する。

時安¹⁴⁾は、複数の個人が集まって共通の文化および文化形式を共有している場合、その個人は文化集団を形成している。国民、民族、エスニック集団、地方、都市に始まり、ジェンダー、セクシュアリティ、階級、職業集団など、さまざまな大きさ、レベルの文化集団がありうる。個人は同時に複数の文化集団に所属しており、現代の社会は数々の文化集団を複層的にその内に含んでいる。現代社会は多元的に文化集団が存在する社会、つまり多分化社会である。また、集団的アイデンティティとは、個人的アイデンティティのうちで、個人が属しているある文化集団の成員に共有されているものと考えうるとしている。

田尾¹⁵⁾は、専門職の意識の特徴について①専門的な知識や技術の修得：一貫した体系を持つ高度の知識や技術を修得し、実際に活用できること。②自律性：専門的な権威によって、組織のなかのフォーマルに定義された権限関係から離れて、自らの職業上の要請にしたがって仕事を進めることができること。③仕事へのコミットメント：金銭的な報酬や人間関係によってではなく仕事それ自体のために働くように内発的に動機づけられていること。④同業者への準拠：組織への所属性より、外部の同業者集団に準拠する傾向があること。⑤倫理性：公共の福祉の向上に貢献するという規範によって、判断し行動する独自の倫理綱領を備えていることとしている。

これらのことから、専門職者の性アイデンティティは、社会文化的役割からみる枠組みにおいて、職業上のアイデンティティであり、集団的アイデンティティとして捉える。保育士という文化集団では、専門職者としての意識、少子社会の特徴や要請など、複合的な要因によって、社会的望ましさを中心に据えて、二つの性を共に合わせ持ち、女性性と男性性を独立した次元で捉えようとする性アイデンティティが明らかになったのではないかと考える。

2) Androgynyの概念からみた保育士の性アイデンティティ

Androgynyとは、古代ギリシャのことばでandro(男性)とgyn(女性)からできている(Heilbrun, C.G.,1964)。この概念は、一人の人間が女性性も男性性も共に合わせ持ち、女らしさと男らしさを二つの独立した次元として捉え、それぞれの性にふさわしいと、社会的に付与された事柄を開放し、その場に応じた意識・行動などを取り得ることを提唱している。日本の現代社会における性役割観の多様化によって、今日の性役割を捉えるうえで、男女という既成の枠組みで捉えることは必ずしも有用ではないことを検証した先行研究¹⁶⁾もあり、Androgynyの概念に注目した。

保育士は、児童福祉施設（保育所など）で子ども（主に小学校就学前の乳幼児）の保育を行い、子どもたちのケアの中心を担う職業である。保育士資格は社会福祉関係では、もっとも歴史の古い資格で昭和23年に「保母」資格として誕生し、平成11年4月から「保育士」に改められている。保育士は厚生労働省管轄の専門職である。保育士の約9割が働く保育所では、親の仕事と家庭の両立を支援し、乳幼児を主に日中預かり安全に保育する家庭機能と、子どもたちの心身の発達、成長を促進するための活動を行っている。衣服の着脱、食べる、眠る、排泄する、手を洗うなど感染予防など、基本的な生活習慣が身につくように、また、遊びなどの集団活動を通して、走る、歩く、跳ぶなどの運動習慣、さらには、喜ぶ、怒る、話す、笑う、泣くなどの社会性が身につくように、子どもたちに関わっている。

今日、日本の社会は、子どもの数の減少や家族形態の多様化。子育てを伝承する人の不在や機能の衰退、両親の離婚や再婚の増加、乳幼児虐待など、子どもを取り巻く環境も問題も複雑で多岐に渡っている。子どもが安心して健やかに育つように、保育士は、親や祖父母などを対象にした育児相談の、育児情報の提供などを行い、保育所内に地域子育て支援センターとしての役割機能を持つ体制がつけられてきている。

今後さらに、伝統的な性別役割に捉われないことなくいずれの能力も高め、高度な専門性を希求し、社会的望ましさを中心に据えた性アイデンティティについての実証が重要と考える。生涯発達の概念が浸透し、性別よりも一人の人間として、どのように生きていくかが問われる今日、女らしさと男らしさという文化的定義に対応する自己概念を合わせ持つAndrogynyの概念が改めて検討され、新しいパラダイムが生まれる時代がきているのではないかと考える。

7. 結語

現代における社会問題の一つとして、高度経済成長期以後、「家庭の教育機能の脆弱化」「家族の衰退」など、都市化・核家族化の進展にともなう家庭の孤立化、家庭や地域における子育て機能の低下がある。

これまでの日本の社会は、生物学的性差に規定され心理学的、文化・社会学的な性差がつけられ、女らしさ男らしさなど一次元的な在り方、性別などが確立してきたが、男女共同参画社会が進む今日、たとえば、『子育て』という人間の営みにおいては、女性（母親）は生物学的な特性である乳汁分泌による母乳を授乳し、男性（父親）は人工ミルクを哺乳することができる。

つまり、栄養を与えるという行為、子育てに関わる役割は男女が共に担うことができると考える。助産師として『生命の誕生』の場に出会ってきた経験を持つ筆者は、男性は仕事、女性は家事も育児も仕事もではなく、男女ともに家事と育児と仕事という体制づくりを進め、人の心が、意識が、幼く小さい弱い生命を慈しむ社会を築くために、ぬくもりと社会規範を伝え、乳幼児が虐待を受けて『いのち』を脅かされることを予防していきたいと考えている。

そのため的手段として、一人の人間が女性性も男性性も共に合わせ持ち、女らしさと男らしさを二つの独立した次元として捉え、それぞれの性にふさわしいと、社会的に付与された事柄を開放し、その場に応じた意識・行動などを取り得ることに関する実証的な研究を続けていきたい。

謝辞

本研究の調査にご協力をいただきましたA県で働く保育士の皆様、ご配慮をいただきました施設の皆様に深く感謝申し上げます。

<引用文献>

- 1) 下條英子『ジェンダー・アイデンティティ』風間書房（東京）、1998.
- 2) 松村恵子『母性意識を考える』文芸社（東京）、2005.
- 3) 松村恵子『乳幼児を子育て中の母と父の母性意識の構造』母性衛生45巻1号, p98-111, 2004.
- 4) 松村恵子『母性意識に関する実証的研究～ 助産師の母性に関する認知と三歳児神話についての分析～』母性衛生第43巻2号, p360-371, 2002.
- 5) 松村恵子『青年期の男女学生における母性の認知構造』母性衛生第42巻2号, p481-492, 2001.
- 6) 松村恵子『母性意識の構造と発達』真興交易医書出版（東京）、1999.
- 7) 福富護『性の発達心理学』福村出版（東京）、1983.
- 8) Margaret Mead 田中寿美子/加藤秀俊訳『男性と女性』東京創元社（東京）、1981.
- 9) 前掲6)
- 10) R.M.ラーナー/N.A.ブッシュ＝ロスナガール編 上田礼子訳『生涯発達学』岩崎学術出版社（東京）、1990.
- 11) 前掲6)
- 12) 柏木恵子『現代青年心理学講座5：現代青年の性役割の習得』金子書房（東京）、1973.
- 13) 前掲1)
- 14) 時安邦治『文化、アイデンティティ、承認の政治～多分化主義から複数性の民主主義へ～』大阪大学人間科学部『年報人間学』第18号, 1997.
- 15) 田尾雅夫『ヒューマン・サービスの組織—医療・保健・福祉における経営管理—』法律文化社（京都）、1995.
- 16) 泉 亜由美『性役割についての研究～BSRLの妥当性の吟味と新たな性役割観の展望～』日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科, 8, p53-58, 2002.

(香川県立保健医療大学教授)